

草庵仏教

第163号
(発行日)
2004年1月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2丁目7-20
電話・FAX (0798)
63-4488
(発行人) 土井紀明
メール：kimyou4@yahoo.co.jp
http://www.eonet.ne.jp/~souan

《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉
毎月22日午後2時
.....
- 〈念仏座談会〉
第1土曜日午後3時
第3土曜日午後3時
* 8月の〈同朋の会〉及び
第3土曜日の念仏会は休み。

怨みを超えて

アメリカの軍隊がイラクを制圧してからも、アメリカ兵へのテロが続いている。アメリカだけではなくて、アメリカに同調する国の関係者もテロの標的になっている。

もともとアメリカがアフガニスタンのアルカイダ政府を打倒し、続いてイラクのフセイン体制を制圧したきっかけは二〇〇一年九月十一日のアメリカ同時多発テロ事件である。この事件はアメリカ人に大きな衝撃を与え、アメリカ国民の大多数の世論が「テロの撲滅という大義」に一挙に傾いた。そしてその矛先はまず、テロを指導していたビンラーディン一味とそれと組んでいたアフガンのアルカイダ政権であった。国際世論も同調し「テロ撲滅の大義」を背景にアメリカはアフガンに、続いてイラクに攻撃を行ったのである。

これらの戦闘によってどれだけの多くの無実の人たちが犠牲になったかは詳しく知らないが、双方でニューヨークでのテロの犠牲者の十倍以上の人々が亡くなったことは間違いないし、負傷して障害者になった人はどれほどであろうか。

テロという殺傷行為を行うも

のを空爆で叩くという荒っぽい対処は、実際のテロの犠牲者の

何層倍もの一般人の犠牲者を生み出しているが、こういうやり方で果たしてテロが無くなるのであろうか。

しかも、今回のアメリカの軍事的制圧の背景には、ニューヨークのテロ事件への報復の意図が多分にある。いわば「目には目を、歯に歯を」という論理である。そうすると、この報復はどこまでも繰り返されていく可能性がある。

それを長い歴史的な点から見ると、欧米のキリスト教徒には、ヨーロッパ中世からずっとイスラム教徒によってずいぶん痛い目に遭ってきたという怨念が意識の底流にあるのではなからうか。

アメリカではキリスト教原理主義者が力を持ち、それを強力な政治的背景にしているブッシュの考えの中にもこのような一種の敵対感情があり、それが今回、相手がイスラム教徒であるという事で、容易に武力攻撃に傾いた遠因であったと思われる。

ブツダが

『実にこの世においては、怨みに報いるに怨みを以てしたならば、ついに怨みの息むことがない。怨みをすててこそ息む。これは永遠の真理である』

(ダンマパダ)

といわれて、怨みをはらすという報復をいましめ、怨みをすてることが永遠の真理であると教えられるが、この教えを私たちは胸に刻むべきではなからうか。怨みの報復は怨みの連鎖をうみだすばかりであって、怨みを捨ててこそ相手からの怨みの行動はなくなっていく。

法然聖人が幼い頃、父の漆間時国が稲岡庄の預所明石定明の夜襲を受けて、致命傷を負った中で、子供の勢至丸(後の法然)に「仇討ちをしてはならない。仇討ちをしようとまた相手が怨んで仇を討ってきてやむことがない」と遺言し、それが縁で法然聖人は敵も味方も、いわゆる怨親がともに平等に救われる道として佛道を求められたのは有名な話である。

悪を滅ぼして正義を立て、不義の敵を抹殺して平和をもたらそうというが、その悪や不義というものが、そんなにハッキリと初めから決まっているのではない。どちらも正義を掲げ、大義を主張している。それだから、お互いの争いにストップがかからないのである。

しかしどちらにしても、どんな正義であっても、人間にとつて一番いとおしい生命を殺傷することほどお互い苦痛なことはない。ブツダの戒められた最も大事

な戒めは「アヒンサー」である、いわゆる不傷害、不殺生である。「殺さない」である。どんな正義を掲げる者もまず他のいのちに対して暴力をふるわないこと、これが前提ではなからうか。

世界の宗教の中で、佛教とジャイナ教(インドの宗教で佛教によく似ている)ほど、アヒンサーを強調する教はない。マハトマ・ガンジーはインド独立運動において非暴力による政治革命を指導した。政敵や反対者や異端分子を殺害して政治の実権を握るのが普通の歴史において、暴力をもちいずに政治的理想の実現に成果を収めたこの経験は二十一世紀の光である。

ただ相手が武力で侵略してきたり殺しにかかってきた時、これを防衛するために武器で応戦することは、やむを得ない場合があるのがこの世の現実である。必要悪としてやむを得ないことがある。しかし、純粹な防衛以外の武力行使は行わないのが最低限守るべき正義である。

そして、理不尽なテロを行う者を、ただ殲滅することで解決しようとするのではなくて、彼らの考えを善なる方向へ、あるべき方向へ正すことが大切となるが、そのためにはまず自らの誤りを正すことであろう。その上であるべき姿を相手に示し、道理を明確にして反省を促す努力こそ十分にすべきことである。

真理の力が平和への基礎であり、真理・道理によって、あやまれる見解を正すのである。

そしてテロという手段で目的を遂げようとする誤りをただすと同時に、そういう考えを起す因子となっているさまざまな社会的悪条件を改善すべきである。

目に余る貧困や差別や人権の抑圧が、テロリストを次々とつむ温床となっているのだから、これらを改善する地道な努力こそ問題解決への近道であって、一時的にテロリストを抹殺しても報復と怨みの連鎖は続くであろう。

テロは圧倒的な弱者が強者に対する最後の手段として、歴史を繰り返されてきた。しかし今日、最後の手段としてのテロではなく、テロそのものが即効力のある有効な手段であるかのようにテロに大きく傾斜している。また、こうした誤った観念をうえつけ、テロへと人々を走らせる偏った「独善的、狂信的な教育」が秘かに行われているとのことである。

行動の本は思想であり、思想は教育によって養われ広まる。あやまれる思想教育を改善することもまた急務である。

そして、「殺された側の国家や民族が、その怨みをはらすために相手に殺す。それによって自

らの怨みをはらす」ということは、人間的な感情としては分かるが、しかしそれは煩惱である。怨みや憎しみは煩惱で、その煩惱を報復するというものでいやそうとするのはもう一つの煩惱である。

このことは最近の死刑判決にも現れていないだろうか。オウム真理教事件や池田小学校事件に限らず凶悪な犯罪者を死刑にすることにによって、被害家族の苦しみや怨みをはらすという意図を死刑判決の中に見る。確かにそれである程度の悔しさの苦ははれるかも知れない、しかし、それによって誰も更に人間的成長もしないし、真理に近づくこともない。犯罪者はその悪を自覚する機会を失い、罪を懺悔することもなくこの世から消えていく。被害者家族もそれで死んだ者が返ってくるわけでもなく、ただ一時的に胸をおさめただけである。

人生の理不尽の嘆きを根源的に問うことこそもっとも大事なことでないだろうか。残された者の不幸が一体どこで解決をするのかをこそ問わねばならないと思うのである。罪を犯した者も、またそれによって不幸のどん底に落とされた家族も共に、いわば怨親ともに、救われる真実はないのだろうか。また亡くなった被害者が死して後にあべき真実はないのだろうか。

*

アメリカのイラクへの進撃だけでなく、最近の死刑判決を見ても、報復の論理、怨みをはらす論理が目立って仕方がない。そこには人と世界に働きかけている「一切群生、光照を蒙る」（正信偈）の真実が一顧だにされていない。

犯罪者の裁きは本質的には自業自得で、すでに彼の行いが自らを裁いているのである。あえて言えば、真実の道理が人を裁く。それを露わにし、人々に道理の感覚を自覚せしめようというのが人間の犯罪に対する裁判の判決ではなからうか。それゆえ人が人をさばいて生命を死に至らしめる死刑には、人間の橋慢があるのではなからうか。人間の裁判すらそれに照らされるべき真実こそ、阿弥陀仏の真実ではないであろうか。その真実を積尊は説かれ、聖人は教えてくださった。テロを行う者もこの真実によって自らの罪を知り、親しい者をテロで失った者もこれによって憎しみと悔しさが浄化されていく。また犠牲者もこの真実にあつてこそ、永遠の救いがあるのではなからうか。



文箱 1
(C)SHOGAKUKAN INC.

我が名を称えよ

（金子大栄先生のお言葉より）

○親鸞聖人の御一生の経験から出てきたものは何であるかというところ、「ただ念仏して」ということである、さればその中にあらゆる人生経験が摺まっておるのである。それを本願の方から申しますれば、「わが名を称えよ」という一句の外に五劫思惟もなければ永劫の修行もないということでありませう。五劫の思惟というも、永劫の修行というも、仏の慈悲というも、本願というも、要するに「わが名を称えよ」という一句に摺まる、ただその為に私は苦勞されたのである。その「わが名を称えよ」という一句が本心に聞こえたら、この胸が破れなければならぬ。五劫思惟がどうの、永劫の修行は解らぬというの、要するに「わが名を称えよ」と仰せられるそのお心持を知らないから言うに過ぎないのである。解つて見れば南無阿弥陀仏の回向より何ものもないのである。「わが名を称えよ」、その一句の中に仏の全生命がこもっておるのである。その一句の御回向の恩徳広大不思議にてわれらが救われるのであります。

（『正像末和讃講話』下。P一四二）

○仏の大きな真実は、今度は「称我名字」の一つに入ってしまう

のでございます。即ち、仏が吾々に向かつて「我が名を称えよ」とおっしゃる一句の中に、仏の真実の全体の表現があるのである。「我が名を称えよ」というところ、仏のあらゆるまことこもっているのであります。至心・信樂・欲生我國という風に、いろいろ並べてあるが、いよいよという時になると、昔の高僧は、善導大師にしても、或いは法然聖人にしても、第十八願は「我が名を称えよ必ず救う」という本願である、とおっしゃるのです。その「我が名を称えよ」という一句に、どういふものが感ぜられるか、そこに信があるので、極めて簡単なのであります。

（『教行信証講話』P七十）

○「我が名を称えよ」の一句は、吾々人間がどういふ生活をしてるか、ということを見透している者の一句である。人間の悩みを知り抜いている者の言葉である。これではどうしても助からない状態であるところの人間であるということを知り抜いて、それをいたみ悲しんで、その涙から「我が名を称えよ」という一句が漏れて出てきたのである。だから「我が名を称えよ」の一句に盛られている真実は、如何に説いても説き尽くせないところの、廣大無辺の真実をもっておりませう。

（『教行信証講話』P七十一）

歎異鈔 第十四章第四講

摂取不捨の願をたのみたてまつらば、いかなる不思議ありて、罪業をおかし、念仏もうさずしておわるとも、すみやかに往生をとぐべし。
(歎異鈔第十四章)

現代語訳(すべての衆生を光明の中に摂め取って決して捨てないという阿弥陀仏の本願を信じておまかせすれば、どのような思いがけないことがあって、罪深い行いをし、念仏することなく命が終わろうとも、速やかに浄土に往生することができるとのこと。)

「摂取不捨の願」というのは阿弥陀如来の第十八願のことです。第十八願は一切の衆生に「我が名を称えよ」(乃至十念)と願い、「そのまま摂め取って救う」(若くは不生者不取正覚)と誓いたもう大悲の本願であります。それゆえにこの願を「摂取不捨(おさめとってすてない)の願」といわれ、この誓いを聞いて「私をお助け下さることよ」と聞き受けることを「弥陀をたのむ」と申します。ですから摂取不捨の願をたのむとはこの願を信受することです。

南無阿弥陀仏と聞くことは阿弥陀様が「汝をおさめとって決して捨てず、汝を導き浄土へ生まれさせる」という約束を聞いていることです。この大悲の約束を聞くことは、「阿弥陀様がともにいて下さる。浄土へ生まれさせて下さる。ああり難い」と聞いていることです。こ

の南無阿弥陀仏に包まれ、南無阿弥陀仏に導かれ、南無阿弥陀仏に抱き取られての一日一日です。いわば阿弥陀仏に摂め取られての生活です。阿弥陀仏に摂め取られていることを、お念仏に聞きつつ生きるのです。

たとえ「いかなる不思議ありて」で、おもしろいような縁が来て「罪業をおかすことがあっても、またたとえ臨終に臨んで罪業を犯してしまおうとも、阿弥陀仏の「罪はいかほど深くとも汝を捨てず、かならず助ける」という誓願力に護られて、念仏せずに命終してもすみやかに浄土に往生させていただくのである、と仰せ下さるのです。

蓮如上人がお文に「阿弥陀如来のおおせられけるようは、末代の凡夫、罪業のわれらたらんもの、つみはいかほどふかくとも、われを一心にたのまん衆生をば、かならずすくうべしとおおせられたり」

(四帖目九通)

という、その仰せに包まれて、罪業の有無や、臨終の善し悪しというような凡夫の側の「行い」や「ありよう」や「すがた」の如何に一切関係なく、凡夫そのまま「我は汝を極重悪人と見定め、そんな汝なればこそ、我は汝をまるまる引き受けて浄土へ生まれさせずにはおかない。これ我が不可思議の誓願なり」との阿弥陀仏の大悲の仰せ一つに我が胸が充たされるのであります。

私たちのいかなる罪悪もさわりとならずに、阿弥陀仏の本願の約束によってなぜ浄土に往生することができるのでしょうか。この問いをあえて取り上げますと、そ

れについては聖人の『尊号真像銘文』に「この如来、十方微塵世界にみちみちたまえるがゆえに、無辺光仏ともうす」と申され、阿弥陀如来様はあらゆる世界(四方八方)のあらゆる境界、また上は仏・菩薩の境界から下は地獄・餓鬼・畜生の世界まで、みちみちておられと仰せられるのです。

もう少し身近に言えば、どのような人の、どのような状況の中にも、阿弥陀仏は充ち満ちておられることです。日本人も中国人にもアメリカ人も阿弥陀仏はともにまします。平和な地域の人の所にも戦争に明け暮れている地域の人の所にも、富める人の所にも貧しい人の所にも阿弥陀仏はいます。悩める人の所にも歓楽に酔っている人の所にも阿弥陀仏はいます。健康でバリバリと働いている人にも病気でベッドにふし続けねばならない人にも阿弥陀仏はともにまします。仏教徒の所はもとよりキリスト教徒の所にも、いな無神論者の所にも阿弥陀仏はいます。罪悪の多少を問わず、老少を問わず、男女を問わず阿弥陀仏はともにまします。

人のいるところ、阿弥陀仏は離れずに共にいます。阿弥陀仏はありとあらゆる所(十方世界)に「みちみちたまえり」であります。阿弥陀仏のともにいまさぬ人はいないと、聖人は仰せ下さるのです。

ということは阿弥陀仏と人は切り離すことが出来ない、いわば阿弥陀仏と人は無条件に「不可分」の関係に置かれているということです。しかし、私は阿弥陀仏ではありません。決して佛ではありません。それどころか罪悪深重の凡夫でしかないので。佛に

背いて煩惱を燃やし続けてはじない煩惱具足の凡夫でしかありません。そういう意味で、佛と人は「不可同」なのです。であれば、「佛と人は不可分・不可同」という関係、これが人の原構造であります。

ですから佛と人の間は何ものによっても分かつことが出来ません。たとえ人が罪悪をどれほど積み、どれほど重大な悪を犯してしまったとしても、佛と人の間を引き裂くことは出来ないのです。罪悪よりも阿弥陀仏と私の関係の方が根源的なのです。

その不可思議な有り難い関係を知らしめ、ついには仏たらしめようとされるのが、ご回向下さる南無阿弥陀仏なのであります。摂取不捨の願はこの原関係から現れ、どこどこまでもおさめとって捨てないという恵みを与えて下さるので

どこどこでも人は佛ではありません。それどころか佛と人の関係を見失い、我と我が物に執着し、愛憎の煩惱を起こしてやまない罪悪深重な者、その者に、罪悪深重にして煩惱具足の凡夫なることを知らしめてくださるのも、阿弥陀仏の摂取不捨の真理の働きによつてであります。佛に背き、佛を無視して罪を重ねて憂苦の生活を送っている者、そんな者に佛は常に寄りそいたまいます。常に「我は汝を助ける親なり、汝が救われねば我もまことの佛にはなれない。汝は我が子なり、我は汝を救わずにはおかない。どうかこの佛の心に気づいてくれよ」と喚びづめの佛が、根源的に人と不可分な佛が、私に現れたもう南無阿弥陀仏の喚び声であります。(了)

平成16年度御年忌年回表

1周忌	平成15年亡
3回忌	平成14年亡
7回忌	平成10年亡
13回忌	平成4年亡
17回忌	昭和63年亡
25回忌	昭和55年亡
33回忌	昭和47年亡
50回忌	昭和30年亡

(25回忌をせずに23回忌と27回忌とする場合があります。また50回忌後は50年ごとになります)

念佛というのとは何であるか。念佛というのとは他にあらぬのである。南無阿彌陀仏を称えるのであるが、その南無阿彌陀仏を称えるという、その声は、最も純粹な意味では「我が名を称えよ」といふことよりほかにない。「教行信証講話」 P 72



文箱 1
(C)SHOGAKUKAN INC.